

湯浅誠著 『「なんとかする」子どもの貧困』角川新書（2017年）

本書のメインテーマは「子どもの貧困を解決するにはどうすればよいか」ということである。本書では、子どもの貧困問題の全体が視野に入れられており、経済的側面にとどまることなく、子どもの人とのつながりや居場所といった観点も重要視されている。それゆえ、問題の大きさや問題解決へのアプローチの多様さが痛感されているが、それでも「できることを、できる人が、できることから」の精神を持ちながら子どもの貧困対策に取り組む人々や組織の実践例が紹介されている。

簡単に本書の内容を紹介したい。第一章「子どもから社会を見直す」では、子どもの貧困問題を考える際の重要な切り口が示されている。一例をあげると、指標としての「相対的貧困」が簡潔に整理されており、本書では貧困と格差の関係性を考えながら「ある程度の許容の範囲の格差」と「過度の格差」の境界を示す目安として「相対的貧困」が説明されている。機械的な指標である相対的貧困では子どもをとりまく状況を一義的に説明できるわけではないとしつつ、ある程度の格差は努力の源となりえる一方、度が過ぎた格差はあきらめや社会的孤立などを招き社会の活力を削いでしまうことが指摘されている。

第二章「あきらめない人たち」では、子どもの貧困対策のうち民間の活動の柱となっている「こども食堂」と「無料塾」の取り組みが紹介されている。このうち、こども食堂については大きく二種類に分類化され整理されている。一つ目は「共生食堂」であり、これは経済状況に関係なく子どもから大人までを含めた交流拠点としての機能を備えている。二つ目は「ケア食堂」であり、貧困家庭の子どもを対象とした食事面や栄養面でのサポートや、生活課題への対応を行なう機能を持っている。本書では、共生食堂とケア食堂は互いの機能を相互補完しながら子どもの利益となることが望まれている。

第三章「できることを、できることから」では、子どもの貧困対策を行う自治体や企業の取り組みが紹介されている。例えば、行政が持つ多様な情報を活用しながら子どもの貧困対策を行う兵庫県明石市、教育に関する貧困対策に力を入れる長野県、学校とNPOが連携したフードバンクの活動などが紹介されている。こうした事例をあげながら、子どもの貧困への関心が社会全体に広がりつつあることが示されている。

第四章「社会を作り直す」では、さらに多様なアプローチによる子どもの貧困対策が紹介されている。ユニークな事例としてAI（人工知能）研究と子どもの読解力テストへの取り組みがあげられている。貧困家庭の子どもは相対的に学力が低い。AIによって仕事の代替が予想される時代を貧困家庭の子どもが生き抜くためには、公教育の中で読解力を身に着ける必要がある。読解力がなければ、新たな職への移行が困難となるだけでなく、貧困に対する援助を申請できないことにもつながる。その課題を解決するための調査研究がユニークな貧困対策として紹介されている。

本書は子どもの貧困を「なんとかする」ために挑む人々や組織の実践集でもある。そのような実践事例を紹介することは、実践家たちを応援し、社会に活動を周知し、問題への関心を高め、さらに実践の輪を拡げていくことにつながるだろう。そのような意味において本書も子どもの貧困対策の一翼を担っているといえる。（中川 敬士）